ゲ　ー　テ

大山定一訳

世界古典文学全集

50

筑 摩 書 房

ゲーテ　　　世界古典文学全集　第50巻

昭和39年10月25日第１刷発行
昭和60年４月20日第３刷発行

訳　者　大　山　定　一

発行者　布川角左衛門

発行所　株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町 2—8
郵便番号101—91　振替東京6—4123
電話　東京　291—7651（営業）
294—6711（編集）

0397-20350-4604　　　三晃印刷／矢島製本

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが，小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

ファウスト　大山定一訳　5
ゲーテ詩抄　大山定一訳　289
解説　大山定一　341
年譜

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ゲーテ

ファウスト

捧げることば(1)

かつてわかき日のわたしの眼に浮かんだ、おぼろな姿が、
ふたたび影のように、揺れながら近づいてくる。
今度こそ、おまえたちをしっかり捕えてみたい。
わたしの心はなつかしい昔の夢にあたためられる。
ひしめきながら押しよせてくる姿よ、よし、そのままに
霧や靄のなかから立ちあらわれるがいい。
おまえたちの群れをつつむ魔法のいぶきが、
わかわかしくわたしの胸をゆすぶるかのようだ。

おまえたちは楽しかった日の、かずかずの思い出をもってくる。
なつかしい人々の面かげが、ほのかに浮かびだす。
なかば消え去った古い物語のように、
初恋も友情も、わたしの心によみがえった。
悲しみは新たになり、嘆きはまたも人生の
苦悩や煩悶をくりかえす。ただかりそめの幸福にあざむかれて
美しい青春の時を失い、すでに亡き人の数に入った
旧知の人々の名をわたしは呼ぶ。

わたしが最初の歌を聞かせた人は
もはや次の歌を聞くことができないのだ。
たのしい友だちの宴は破れてしまった。
はじめの反響はもう帰って来ない。
わたしの嘆きはただ見知らぬ俗衆の耳にひびくだけ。
かれらの拍手がいっそうわたしの心をさびしくする。
かつて楽しげにわたしの歌に耳をかたむけた人々は、
たとえこの世に残っていても、ちりぢりに分れてしまった。

しずかな荘厳な霊たちの国へ、
ひさしく忘れていたあこがれがよみがえる。
小声につぶやくわたしの歌はエオルスの琴(2)の音のように、
風にながれて嫋々とひびくのみ。
はげしく身体がふるえ、とめどもなく涙が頬をぬらす。
かたい心がやさしくなごんでくるかのようだ。
手に持っているものが遠くへ退いたように見え、
消え失せたものが、ふたたびわたしの前に現実の姿となる。

舞台の前戯

座主、作者、道化。

---

(1)　通例、献辞といえばミューズにささげるものである。でなければ、国王や貴族など、作者の庇護者にささげるものにきまっているが、ゲーテは親しい読者にむかって自己のなまなましい感懐を告げるのである。

(2)　エオルスの琴は、風によって鳴る自鳴琴の一種で、哀音をだす。エオルスはギリシアの風神の名。

座主〔1〕 きみたち二人は、わたしの困った時には、
いつもすすんで力を貸してくれた。そこでひとつ、
ドイツ各地で、今後われわれがどういう興行をしたらいいか、
腹蔵のないところを聞かせてくれたまえ。
わたしは世間の人々を大いによろこばせてやりたい。
自分もたのしみ人もたのしませるのが、世の中というものだ。
すでに丸太は立てられたし、板も張られている。
みんなは、さて、どんなおもしろいことがはじまるかと期待している
のだ。

見物はかたずをのんで、眉をつりあげ、
ひとつびっくりするようなものが見たいと待っている。
わたしも大衆の心をつかむ手は十分心得たつもりだが、
今度という今度ばかりは弱ってしまった。
格別世間が傑作になれっこになったというわけではない。
だが、何しろおそろしくいろいろなものを読んでいるからね。
新作がぴちぴち生きていて、しかも面白くて有意義、
という工合にやるのには、どうしたらいいだろう。
わたしはあっという大入りがねらいたいのだ。
人々の波が小屋へ押しよせてくる。
大波が引いては打ち返すように、
せまい恵みの門〔2〕を通ろうとひしめき合う。
まだ日も高い四時というのに、人々は、
押しあいへしあいして切符売場を取りまき、
まるで飢饉の年にパン屋の店先で争うように、
一枚の入場券のために首の骨を折ろうとする。
十人十色の人間に、このような奇蹟を起こさせるのが、
親愛な友よ、それが一座の作者の力だ。今日は一つ、その力をみせて
もらいたい。

作者〔3〕 その雑多な大衆がぼくのいちばんの苦手です。
かれらの顔を見ると、詩の精神（ポエジイ）は逃げてしまいます。
押しあいへしあいする群集は、どこかへ隠してください。
あの渦巻に呑まれたら、わたしたちはもうおしまいです。
わたしは、むしろ静かな天国の片隅へつれていっていただきたい。
詩人のきよらかな喜びはそこにしかありません。
愛と友情が神々の手によって
心の内奥の祝福をつくりだし、それを育てるところです。

わたしたちの胸のなかから、何ものかが生まれてきます。
唇がはにかみながら、片言のようにそっとささやきます。
案外にうまくゆくこともあれば、うまくゆかぬこともある。
しかし、それを荒々しい瞬間の暴力が容赦なく呑みこんでしまうので
す。
だから、何年も何年もかかって、
やっと完全なかたちに出来あがる作品だってあります。
きらきら光るものはほんの一時のものでしかありません。
真実なもののみが長く後世まで残るのです。

道化〔4〕 いやはや、後世なんて言葉は聞きたくないですな。
わたしが後世のことばかり気にやんでいたら、
いったい誰が現代の生きた人間を楽しませてやりますか。
たのしみたい人間は、たのしませねばなりません。
だから、ひとかどの役者が一座にいるというだけで、
かなり大したことですよ。
見物をよろこばす腕と芸さえあれば、
大衆の気まぐれなんかにくよくよすることはいりません。
大ぜい集まれば集まるほど、それだけ芸のやりがいがあるというもの
です。
そこで一つ、あなたはぜひ本腰をいれて、みごとにやってもらいたい

ものだ。
詩人の空想にあらゆる合唱をそえて聞かせるんですな。
理性もあれば、悟性も感情も情熱もある、といった工合です。
それにもう一つことわっておきますがね、おどけを忘れてはいけませ
んよ。

座主　そうだ、まず何よりも盛りだくさんにねがいたいものだ。
見物はただ見にくるのだ。何でも見たがっているのが観衆だ。
だから、いろいろなものを目の前にならべてやりさえすれば、
みんなはおどろいてただ口をあけて眺めているだろう。
きみは広く大衆の心をつかんで、
たちまち人気作者になる。
数は数でこなすよりほかに方法がないのだ。
めいめいは、けっきょく、すきずきに何かをさがしだすにちがいない。
たくさん持ち出しておけば、それでよりどり見どりというわけだ。
みんながけっこう満足して帰ってゆく。
お芝居を書くからには、やはりお芝居たっぷりにねがいたいね。
何もかもほうりこんで、うまいシチューをこしらえる――あの手をつ
かうことだ。
工夫もお手がるなら、膳立もお手がるでいい。
苦心惨憺して全体をまとめたところで、まったく無駄な話。
どうせ見物は、てんでにむしり取ってしまうだけだからね。

作者　そのような手さきの仕事がどんなにつまらぬものか、あなたには
わからないのです。
そんなものは真の芸術家を恥かしめるだけです。
黙って聞いていると、くだらぬ先生がたのやっつけ仕事が、
あなたには何よりもありがたい金科玉条というのですか。

座主　せっかくの非難だが、まあ馬の耳に念仏というところだね。
一仕事やってみようという男には
第一に道具しらべが肝心だ。
考えてもみたまえ。きみは軟かい木を割る役目だ。
きみはいったい、誰のために芝居を書くのかね。
退屈しのぎに来る客もあれば、
山もりごちそうになった腹ごなしに来る客もある。
もっと手におえぬのは
新聞や雑誌を読みあきてから来る客だ。
仮装舞踏会のつもりで上の空で来るのもあるし、
物見だかい好奇心だけで駆けつけるのもある。

---

(1)　十八世紀末のドイツは、まだ劇場らしい劇場がほとんどなかった。小屋がけの旅まわりの芝居が普通である。座主はそのような一座を組織する興行師である。だから彼の演劇観は観客の俗悪な趣味と好みに迎合すること、大当りをとること以外ではない。

(2)　聖書の「狭き門」から来ている。

(3)　作者は上演脚本に手をいれたり、プロローグやエピローグを書きそえたり、自作を劇団の新しい上演曲目に加えたりする座付作者である。座主が演劇をスペクタクルであり興行であると考えたように、作者は演劇を純粋なポエジイであると主張する。しかし、ゲーテはただ「作者」の立場から「座主」を否定するのではなく、むしろゲーテ自身が「作者」と「座主」の二つの立場に分裂するのである。(たとえばタッソーとアントニオのように。)一方ではポエジイの純粋と統一を主張し、一方では新しい画期的なセンセーションをねらう。『ファウスト』はもっとも大胆な、野心的な、演劇のこころみであった。

(4)　道化は別に作中の人物や事件とは大した関係なく、舞台に登場して人々をわらわす俳優である。(上演にあたっては、メフィストの役者がこの道化になる。)彼は俳優の立場から彼らしい独自な演劇論を述べているが、ここにもゲーテの演劇観の一端が語られていると見なければならぬ。ゲーテは「舞台の前戯」で、当時のドイツ演劇を分析批評しながら、自己の『ファウスト』における抱負や主張をあらゆる角度から立体的に解説しようと試みている。

そのうえご婦人がたときたひには、一文のギャラなしに、
お化粧と顔を見せに来て、けっこう芝居までしてくれる。(1)
きみは詩人の天国でどんな結構な夢をみているのだね。
満員の客席がやはりうれしいとすれば、それはなぜだろう。
そばへよって観客の顔つきをよく見るがいい。
半分は冷淡だし半分は野暮だ。
芝居がはねたらトランプをやろうというもの。
女の胸にしがみついて一夜を騒ぎあかそうとするもの。
そんなくだらぬ目的のために、わざわざミューズの女神を苦しめるのは、
馬鹿のこっちょうといわねばならん。
だからだね、もっともっと、何でも盛りだくさんに振舞うことだ。
それでぜったいに、まとのはずれっこはない。
しんから満足さすことができないとすれば、
みんなを煙にまいてやればいいのさ。
おや、どうしました？　感動したのですか、胸が切ないのですか。

作者　それならどこかへいって、ほかの奴隷をつれてきてください。
自然があたえた最高の権利を、人間の自由を、
わたしは強いてあなたのために
無造作にすててしまわねばならぬとでもいうのですか。
詩人は何によって人々の心をうごかすのです。
詩人は何によって宇宙の万物を支配するのです。
それはこの胸からあふれ出て、全世界をふたたび心のなかに汲みいれる、
美の調和ではないでしょうか。
自然は終りのない糸をただ無関心に撚りながら、
何が何でもつむに巻きつけるだけです。
すべての生きものは順序もなく秩序もなく
あらゆるものを雑多にならべて、いやらしい騒音をたてています。
何の変化もなくながながとつづいたものに、
溌剌とした区切りをあたえ、リズムと生動をつくりだすのは誰ですか。
ばらばらのものを普遍な霊感によびさまし、
それらに荘厳な諸調をうたわせるのは誰ですか。
はげしい風雨を情熱のあらしに化するのも、
夕ばえの光に崇高な意味をあたえるのも、
恋人のあゆむ道のほとりに
うつくしい春の花々を咲かせるのも、
意味のないみどりの木々(2)の枝をありとあらゆる名誉のシンボルとして
みごとな花環にあむのも、いったいそれは誰がするのです。
そして、オリンポスを昔のままに守って神々をつどわせるのは、誰ですか。
すべては詩人のなかに啓示された人間精神の力にほかなりません。

道化　なるほど、では、その結構な力を存分に発揮してもらいたいものですね。
そして、詩人とやらの商売を思いきりうまくおやりなさい。
きっと恋の冒険に実がいるのとおなじことでしょう。
はじめは偶然ちかづきになる。何やらを感じる。ふと足がとまる。
だんだんもつれて、ぬきさしならぬことになる。
ほのぼのと幸福が芽ばえる。はたから水をさす。
いい気でいるうちに苦労がつもる。
というちに、もうりっぱな一篇のロマンスができている。
ひとつ芝居もそういうふうにやりましょうや。
人生のまっただなかを大胆につかむことですね。
やっている本人は、たいていは気がついていないのです。
だが、あなたがつかむと、それがおもしろいものになる。
いろいろな情景をならべて、ちょっとあかりをそえておく。
まちがいだらけのなかに、一すじ真理の光を投げいれる。
それだけで最上の美酒がかもされるのです。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

みんながよろこんで乾いた喉をうるおしますよ。
むろん、つぼみのような青年たちがあなたの芝居を見にあつまってきます。
そして、啓示にじっと耳をすまして聞き入るでしょう。
わかい繊細なたましいがあなたの作品から
メランコリイの露を吸うのです。
のみならず、あれもこれもと感情が掻きたてられる。
みんなは一人一人、自分のこころに持っているものを拾い出すにちがいない。
わか者たちはまだ泣くことも笑うことも知っています。
感激に心をたかぶらせたり、色や形に心をよろこばすことも、けっして忘れはいたしません。
すでに出来てしまった人間は、何を持っていっても満足しませんが、
これからという人間は、けっこうよろこんでくれますよ。

作者　それなら、ぼくに過ぎ去った青春の日を返してください。
ぼく自身がこれから人間になろうとしていた時代です。
かずかずの歌がいずみの水のように
あとからあとからと新しく湧き出しました。
うす霧が世界をほのかにつつんでいました。
花のつぼみが不思議を約束しました。
ぼくは谷いっぱいに咲きみだれた
うつくしい花を思うままにつみとりました。
何も持たなかったけれども、ぼくは心から満足でした。
はげしく真理を求める心と幻をよろこぶ心がありました。
どうかあの衝動をすっかりそのまま返してください。
苦しみにみちた深い幸福を、
憎悪の力と愛の情熱を、
ぼくの失われた青春を返してください。

道化　いやいや、まあ落ちついてよく聞きたまえ。青春を取りもどさねばならぬのは、
戦争にいってあなたが強敵とたたかわねばならぬ時ですよ。
かわいいむすめが両の腕に力をこめて
あなたの首っ玉にぶらさがる時ですよ。
マラソン競争の決勝点から
名誉の花環が遠くあなたをさしまねく時ですよ。
つむじ風のようなはげしいダンスのあとで、
主客いっしょに幾晩も飲み明かそうという時ですよ。
しかし、大胆に、優雅に、なれた手つきで
竪琴の糸をならしたり、
やさしい足どりで行きつ戻りつしながら
それと定めた結末への道をあるいたりする——
それはあなたがたのような老練な先生がたの仕事ですね。
だからこそ、われわれは割引なしにあなたを尊敬しています。
年をとれば耄碌して頑是ない子供にかえるといいますが、
実際は人間いつだって、生まれたままの赤んぼうですよ。

座主　議論はすでに十分うかがったから、
そろそろ行為と実践にとりかかってもらいたい。(3)
いつまでも挨拶をかわしているくらいなら、

---

(1) オヴィディウスの句、「彼女らは見物するために、そしてまた、見物されるために、来てくれる」に拠っている。
(2) 月桂樹である。単なる木の葉が輪かざりに編まれ、うつくしい詩句にかざられて、栄誉の最高のシンボルである月桂冠になった。
(3) 作者は「天才」のインスピレーションを説いた。座主は実践と仕事を求めた。道化は生きた現実の「芸」の功徳を述べた。しかし、この三者はそれぞれたがいに矛盾したり反撥したりするものではない。むしろこの三者が内面的に一つになってはたらくところから、劇作は誕生する。ゲーテは現実の舞台の要求と純粋な詩人の理想を対決させながら、ユーモアもあれば厳粛味もある最後的結論を引きだすのである。

そのままに何か有益なものができてもいいはずだ。
気分がどうのこうのといっても始まらない。
ぐずぐずしていれば気分は逃げてしまいます。
きみが自分から詩人と称するなら
詩にむかって容赦なく号令をかけたまえ。
わたしどもの注文はもう先刻ご存じのとおりだ。
わたしどもは強い酒を所望したい。
さっそくいまから醸造にとりかかってもらいましょう。
今日できなければ明日も駄目、
一日だって無駄にしてはなりますまい。
できそうだとみたら、思いきって、かまわずに
そいつの前髪を引っつかむこと[1]ですね。
一度つかんだら、こんりんざい放さない。
そして、無理にも仕事をつづけるだけです。
ご承知のように、ドイツの舞台では
誰でもやりたいことをやってみるのです。
だから、今度は背景であれ、仕掛であれ、
すこしも遠慮はいりません。
太陽も使うし、月も使いましょう。
星も存分に光らせてかまいません。
水も火も岩山も、鳥もけものも、
みんなご所望どおりです。
ちいさな板がこいの小屋のなかへ
神が創造した森羅万象をとりいれて、
天国から地上へ、地上から地獄へと、
ゆっくりと手さばきよく事件をはこびましょう。

天上の序曲

主、天使の群れ、後にメフィストフェレス。
三人の大天使登場。

ラファエル[2]　太陽はむかしのままに
同胞の星の群れと歌をきそい、
その定められた道を
すさまじい音をたててすすむ。
太陽を見ただけで、理由は知らぬが、
天使たちは力づよさをおぼえる。
偉大な創造の御業は
最初の日のように荘厳を保っている。
ガブリエル[3]　早く、おそろしく早く、
壮麗な地球が回転する。
天国の明るい昼と
恐怖の深い夜が交代する。
わたつみの潮が
岩根にくだけて白い泡をうかべる。
そして岩も海も
永遠の天体の運行に添っている。
ミハエル[4]　海から陸へ、陸から海へ、
あらしがあらしと力をくらべる。
吹きすさぶあらしのまわりに、
深い作用の連鎖がつくられる。
われわれの道の行く手には

おそろしい雷電の破壊の焔がもえる。
しかし、主よ、われわれ神の御使どもは
明るい日々のおだやかな推移をたたえている。
三人の合唱　太陽を見ただけで、理由は知らぬが、
天使たちは力づよさをおぼえる。
あなたの創造の御業は
最初の日のように荘厳を保っている。
メフィストフェレス　旦那がふたたびこうしてお出ましになり、
こっちとらの様子はどうかとおたずねになるので、
ご家来衆にまじって、まかり出た次第です。
ありがたいことに、いつでも旦那はよろこんで会ってくださいますね。
ご一同の衆には冷やかされるかもしれぬが、
わたしははばかりながら、しかつめらしい口はきけません。
いくら気どったところで、せいぜい旦那から笑われるのが落ちでしょう。
それとも旦那は、もう笑うことなんかお忘れかもしれない。
太陽がどうの世界がどうのということは、わたしにはわかりません。
わたしが知っているのは、ただ人間どもがどんなに苦しんでいるかということだけですね。
このちいさな神さまは、昔も今もおなじ性(たち)にできていて、
それこそ最初の日のように奇妙きてれつですよ。
せめて天の光の影をあたえてやらなかったら、
すこしは人間も幸福だったかもしれませんがね。
人間はその影を理性と呼んで、どうするかといえば、
どの動物よりも動物らしく生きるのに使います。
わたしの見たところ、失礼な申し分かもしれませんが、
人間というやつは足の長いきりぎりすと同じですね。
飛んだり跳ねたりしているかと思うと、
すぐそこらの草の中で昔の歌を呑気(のんき)に歌いますから。
それも草のなかだけだといいですよ。
どんな掃きだめにだって平気で鼻をつっこみますからね。
主　おまえのいうことはそれだけか。
おまえはいつも苦情しか持って来ぬが、
永久に地上はおまえの気にいらぬものばかりとみえるな。
メフィスト　まったくですよ、いつになっても、ちっともよくなりませんね。
人間の日々の苦しみを見ているとただ情けなくなるばかりで、
もうわたしでさえからかう気にもならないくらいです。
主　では、ファウストを知っているか。
メフィスト　あの博士ですか。
主　そうだ、わたしに仕える下僕(しもべ)だ。
メフィスト　なるほど、あの博士だけは、奉公の仕方が一風変っていますね。
飲み食いするのも地上のものとはちがっているし、
胸のなかで湧き立つものがかれを遠くへ誘い出す。
自分の異常はなかば意識しているのかもしれません。
かれは天上のいちばん美しい星を取ろうとしているかと思うと、
大地のもっとも深いたのしみをも極めたいと考えています。
近いものも遠いものも
かれの波立つ胸の底を満足させないのですね。
主　いまは何が何だかわからぬままに奉公しているが、
やがてすべてがはっきりする境地へみちびいてやらねばなるまい。

---

(1) カイロスのこと。カイロスはギリシアの幸運の神である。後頭部には髪がない。カイロスをつかむには前髪を握らねばならぬ。
(2) ラファエルは天界をつかさどる大天使。
(3) ガブリエルは大地をつかさどる大天使。
(4) ミハエルは大気中の諸現象をつかさどる大天使。

植木屋だって、苗木がみどりの芽を出せば、
何年か後には、それがどんな花をつけ、どんな実をむすぶかを知っている。

メフィスト　では、賭をしましょう。あの博士をみごとに奪い取ってみせましょうか。
ご異存さえなければ、いまからそっと
わたしの道へ誘惑してやりますよ。

主　地上に生きているあいだは、
むろん、どうしようと、おまえの勝手だ。
人間は努力するかぎり迷うこともあるだろう。

メフィスト　それですっかり安心いたしました。死人を相手にするのは
ちっともありがたくはありませんからね。
まるまるした色つやのいい頬がわたしはいちばんすきです。
亡者なんかはご免をこうむりたいくらいです。
死んだねずみは猫だって相手にしませんからね。

主　よろしい、おまえの好きなようにさせてやろう。
かれのたましいをその根元から引きはなして、
もしおまえの手におえることなら、
遠慮なくおまえの道へひきずりこんでみるがいい。
しかし、おまえは恐れいって、きっと頭をかくだろう。
「よい人間はいくら暗黒の衝動にうながされていても、
けっして正しい道はわすれない」とな。

メフィスト　わかりました。あまりお手間はとらせません。
この賭には勝ってみせます。
もしわたしの思うようになったら、
喉いっぱいの大声で勝利を叫ばせてください。
埃や芥を食わせてみせます。わたしの身内の有名な蛇のように、
きっとうまそうに食いますよ。

主　その時はその時で、勝手にいつでもやってくるがいい。
おまえは自由に好きなことをやればいいのだ。
わしはおまえの同類を憎んだことはない。
およそ否定する霊のうちで、大して荷厄介にならぬのは茶目気をわすれぬいたずら者だ。
どうかすると、人間の活動はたゆみがちになってしまう。
人間は絶対的な無為と休息をもとめる。
だから、わたしは、つついたり引っぱったりして、
悪魔の仕事にせいをだす仲間をあたえておくのだ。
しかし、おまえたち、まことの神の子らは、
生きた生命のゆたかな美しさ[1]をよろこぶがいい。
永遠の発展と生成をやめぬ大きな創造の力が
おまえたちのまわりにやさしい愛の柵を結ぶだろう。
そして現象となってゆらめき変化するものを
おまえたちの堅固な思惟がつなぎとめるのだ。

〔天国は閉じ大天使らは分れ去る〕

メフィスト　〔独白〕ときどきあの大将にお目にかかるのはまったくうれしいことだ。
いつまでも喧嘩をしないように気をつけねばなるまい。
悪魔にさえ、あんなに人間らし[2]い話をしてくれるというのは、
どえらい大旦那の身として、なかなかできぬことにちがいない。

悲劇第一部

夜

高い円天井の、せまい、ゴシック風の部屋、ファウストは机のまえの肘かけ椅子にかけている。不安な態度。

ファウスト　哲学も、法学も、医学も、
そして、よけいな神学までも、(3)
一生けんめいになって
おれは研究した。思えば、
何という馬鹿げたことだろう。
ここにこうしたまま、おれはちっとも賢くはなっていない。
マギスターだのドクトルだのいわれて、(4)
もうかれこれ十年ばかりも、
上へ、下へ、右へ、左へ
おれは学生たちの鼻を引っぱりまわしたが、
しかし、けっきょく、何も知ることができないとわかっただけだ。
それを思うと心が灼けるように痛い。
むろん、おれは、ドクトルやマギスターや牧師や学者というような、
世間の馬鹿者よりは幾分ましかもしれぬ。
もはや懐疑や疑惑に苦しめられることもなければ、
地獄や悪魔をこわいとも思わぬ。
しかし、そのかわりに、あらゆるよろこびが消え失せてしまった。
ひとかどのことを知っているという自惚もないし、
人間を改善したり救済するために
何かを教えるという自信もない。
そのうえ、土地もなければ金もない。
名誉もなければ栄耀栄華もない。
こんな生活をしろといったら、犬もかぶりをふるだろう。
そこで、おれは思いきって魔法に入った。
霊の力と啓示によって
神秘の扉がひらかれると思ったのだ。
苦しい汗をかいて
知りもせぬことを人にいわずにすむだろう――
奥底で世界を統べているものが
認識できて、そこではたらく
すべての力や一切の種子を直観するだろう――

---

(1)　宇宙の大調和、天体をも人間界をもつらぬく生命の変化と統一。「まことの神の子」は天使をさす。だから、以下の意味は、神の創造は終っていない。破壊と生成のうちに、永遠に生きてはたらいているのが、神の創造である。この大調和のうつくしさがおまえたちの心に深い真実の愛をよびさますだろう。そして、その愛は永遠に渝らぬ持続する愛である。ゆらぐ現象として漂うかのごとく見えるものが、かえって、変化し統一する神の創造の作用でなければならぬ。それを真実深く愛することによって初めて正しいイデーをつかむことができるのだ。理性の法則をとらえることができるのだ。「人間は真に愛するものしか知り得ない」とゲーテは言った。

(2)　ヒューマンということ、すなわち、やさしく。悪魔であるメフィストが「人間らしい」という言葉を無意識につかうのは滑稽なイロニイである。

(3)　ヨーロッパ中世の大学は哲学、法学、医学、神学の四学部からできていた。

(4)　中世の学位は、バッカラウレウス、マギスター、ドクトルの三段階にわかれている。

もはや言葉を掻きまわす必要はない、とそう思ったのだ。[1]

まどやかな月よ、おれの苦悩を照らすのも
もう今夜が最後であればいい。
おれは真夜なかに
いくど机のまえでおまえを待ったことだろう。
悲しい友よ。おまえの影は
そのとき書物や紙の上に静かに落ちていた。
おまえの光にぬれて
おれは高い山の上をあるいてみたい。
霊どもと山の洞穴のまわりを飛んでみたい。
夜霧にけぶった牧場をさまよい、
知識のよごれを洗い去って、
おまえのすずしい露に身も心も清めることはできまいか。

ああ、おまえはまだ牢獄につながれているつもりか。
この呪われた陰気な石壁の穴のなかに。
やさしい空の光さえ、ここへは
色ガラスの窓を通って薄よごれて入ってくる。
高い天井まで積みかさねた
埃まみれの虫食いの書物の山が、
せま苦しい部屋をいっそうせま苦しくしている。
そのうえ棚には、すすけた古いノートや紙片がいっぱいつまっている。
まわりに置きならべた容器やガラス瓶も、
無理やりに押しこんだ実験機械も、
先祖伝来の古ぼけた家具なども——やれ、やれ、
これがおまえの世界だ。これが世界といえようか。

胸のなかで、不安に心がしめつけられるのを、
それでもおまえは不審がる気か。
なぜ一切の生の衝動が、
わけのわからぬ苦しみに押しつぶされるか分らぬのか。
神は人間を
生きた自然のなかへ創っておいたのに、
すすとかびのなかで
おまえは動物の骨と人間の骸骨にとりまかれているのだ。

さあ、逃げんか！　広い世界へ出てゆかぬか！
ここにノストラダームス[2]自筆の
一巻の神秘の書物がある。
道づれとして、おまえには恰好なものだ。
おまえは星の歩みを知ることができる。
そして、自然の教えを受けとるなら、
おまえの魂の力が目をさまして、
霊と霊とが語りあう不思議な言葉を理解するかもしれぬ。
しかし、神聖な符は、いくら理屈や思考で
解き明かそうとこころみても駄目だ。
霊どもよ、おまえたちはこのまわりをさまよっているにちがいない。
おれの言葉が聞こえたら、すぐに返事をしてくれ。
〔書物を開いて、大宇宙の符を見る〕
や、これを見ると、たちまち何ともいえぬ歓喜が
あらゆる官能にみなぎってくる。
青春の神聖な生の幸福が、
あたらしく燃えて脈管と神経をながれるのがわかる。
この符を書いたのは神ではあるまいか。
おれの内部のあらしが鎮められる。
あわれな心がよろこびに充たされる。
微妙な内部の促しとともに、おれのまわりに

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com